

西郷隆盛と私学校

—私学校創設の目的に焦点をあてて—

陸晨（北京外国語大学日本語学院）

1. はじめに

「明治維新三傑」の一人と称賛された西郷隆盛は明治6年の征韓論争に敗れた直後、官職を辞め、故郷の鹿児島に帰った。帰郷後の明治7年6月に、桐野利秋と篠原国幹などと共に鹿児島県内に私学校という学校を創設した。明治10年2月に西郷隆盛は西南戦争を起こして、私学校に入校した兵士が主要メンバーとして西南戦争に参戦した。

西南戦争の影響で、西郷の創設した私学校は「反乱士族の組織」（佐々木 1991）や「軍隊であり西郷党の政治教育組織」（井上 1970）とみなされている。そして、陳建旺（2013）や猪飼隆明（1992）が述べているように、西郷が私学校を創設した目的は封建的軍隊を創り、明治政府に対抗するためだという見解も少なくない。これまで西郷隆盛を対象にした研究がいくつか見られるが、私学校創設の視点から西郷隆盛を論考する研究はあまりない。それでは、西郷はなぜ下野後私学校を創設したのだろうか。西郷隆盛が私学校を設立した目的は何なのだろうか。そこで、本発表では、私学校の創設及び私学校における西郷の役割や行動などを明らかにすることで、私学校の設立における西郷隆盛の役割と私学校創設の目的を検討してみようとする。

2. 私学校の設立における西郷隆盛の役割

西郷隆盛は1874年に鹿児島に帰った直後、同年6月に私学校を創設した。私学校は篠原国幹のもとに旧近衛歩兵五、六百人を収容した銃隊学校と村田新八のもとに旧藩砲隊出身者およそ二百人を収容した砲隊学校からなっている。西郷隆盛は実際、私学校において制度上あるいは形式上は何の地位も持っていなかったが、当時事実上の中心人物と認識されている。

西郷隆盛は明治前後の民間に人望があり、人々に敬慕されているため、西郷隆盛の強い影響で県内ひいては県外の青壮年が多く入校した。「西南記伝」によれば、当時天下の人士は西郷を謁見して共に行動することを誇りとしていたとされている。鹿児島県外においても

私学校に入校した青年子弟はいた。例えば、西郷の親友である勝安芳は指導にあたる村田新八に頼んで、人見と梅澤という青年二人を入校させた。他県の青年も私学校に入校したことから、西郷隆盛は当時の社会における影響力が大きいといえよう。

西郷の高潔な品格に憧れている生徒らは西郷がやっていることが正義であり、必ず国民によい未来をもたらすことを信じている。西郷の特別な人格魅力により、私学校は良い未来を目指す有志者を集合でき、教育によりそれらの青年を良い人材に養わせると考えられる。西郷は私学校の創設において、創設の主要指導者であり、重要な中心人物であると思われる。

3. 西郷隆盛が私学校を創設した目的

3.1. 先人の遺志を継ぎ、士気精神を鼓舞する

西郷隆盛は自ら私学校の本旨を二カ条に定めた私学校綱領を手書きして、私学校の本校に掲げた。次第に地方の各分校も西郷を請って私学校綱領を校内に掲げた。私学校綱領の内容は以下の通りである。

一道を同じうし、義相協うを以て暗に聚合せり。故に此の理を益研究して、道義に於いては一身を顧みず、必ず踏み行ふべき事

一王を尊び民を憐むは学問の本旨、然れば此の天理を極め、人民の義務に臨みては一向難に当り、一統の義を相立つべき事

西郷が唱えている「道義」とは、定められた行動様式に従い正しい道路に踏むべきこととだ。士族にその道義を行動方針とし、士族としての精神を継承してもらうと求めていると思われる。このように西郷隆盛は私学校綱領に道義の精神や尊王憐民の重要性を強調した。それは西郷の教育理念の凝縮であることが明らかである。そして、綱領の内容から、学校に通う生徒をさらに修養させる観点もみられる。

また、西郷隆盛は曾て戊辰戦争に殉難した兵士の英霊を祭る文を作り、明治7年5月戊辰戦没者の七周年忌にあたり、「蓋学校教育語」として私学校の各校にあげることにした。その文の内容は以下のように述べている。

蓋學校者所以育善士也。不只一郷一國之善士、必欲爲天下之善士矣。夫戊辰之役、正名蹈義、血戰奮闘而斃者、爲天下善士也。故感其忠、祭之于茲、鼓舞一郷之子弟、亦所以盡學校の職分也。

西郷が理解した学校というのは善士を育つ所であると思われる。そして、生徒に善士としての忠義を感じさせ、生徒を鼓舞することが学校の職責なのである。そこで、国に全力を尽くす精神を後世に継ぎたい気持ちも私学校の建設に流露していると考えられる。この「蓋学校教育語」により、西郷隆盛は生徒の士気精神を鼓舞し、国家非常の際に身をもって貢献できる精神を修養させることを目的にしたと窺えるだろう。

3. 2. 人材教育

私学校は先進的な教育理念を持ち、文武ともに重視し、生徒の向上に取り込めていた。教育内容に関して、私学校は単に生徒に精神修養を向上させる課程を設置しただけではなく、武芸を鍛える訓練や農民の生活に寄り付ける活動なども設けられている。私学校においては学習が言うまでもなく重要であり、春秋左氏傳を内容とする漢学などの講義が行われた。時々の精神訓話、生徒たちの討論と自習自学もあるという。また、軍事訓練の一環として、調練や遠距離競走なども行われている。そして、選抜留学の制度も設けられている。明治八年には木尾満次・救仁郷哲志・日高正雄の三人を欧米に留学させた。明治九年にはまたの二人、野津伝之丞と柏原正一郎を留学させた。

このように、外国語の講義もあり、留学制度も設置されるという先進的な教育内容からみれば、西郷は私学校の教育にかなり心を尽くし、生徒をよりよい人材に成長させたい思いがあるといえる。私学校における課程の設置は豊富で、人材養成に一定の方向を与えたと思われる。そして、西郷は私学校の教育に強い熱情を示したとも思う。

以上のことから、西郷隆盛は私学校において人材を養成し、その優秀な能力を国家建設に活かすことを目的にしたと言えるだろう。西郷隆盛は私学校を設立した主な目的として、国家に貢献できる人材を育成するためだという結論を見出した。

また検討したいのは、西郷隆盛が私学校の主要な指導者であるが、実際の管理者は桐野利

秋と篠原国幹らである。私学校生徒との動向は彼らの言論と行動に密接な関係がある。西南戦争の直前に私学校生徒が蹶起を決めたことは桐野利秋と篠原国幹らに関連があるといっても過言ではない。つまり、西郷は当時既に私学校生徒を抑制できなくなったことは明治10年に西南戦争の挙兵を決定した原因だと考える。西南戦争に至ったのは西郷隆盛の私学校を創設した目的と一致ではないと考えられる。

4. おわりに

以上のように、本発表では、西郷隆盛が私学校における行動や言論に基づいて、西郷隆盛は私学校を創設した役割と目的を考察した。その結果、西郷隆盛が私学校の創設における役割は、私学校を創設する中心人物であり、高い人望により鹿児島県内の士族である文人・武官を集合できたことが分かった。また、反乱軍創設などと関連がなく、人材育成を大切にし、有志者を団結して生徒の精神を高揚させることは西郷が私学校を創った目的を考察した。

参考文献

- 杨孝臣（1984）. 西郷隆盛と西南戦争[J]. 东北師大報, (02):61-66.
- 王哲(2014). 浅議日本西南戦争[J]. 赤峰学院学报(汉文哲学社会科学版), 35(06):45-47.
- 陈建旺（2013）. 论明治初期西郷隆盛的政治理念[D]. 南京大学.
- 黒竜会編（1911）. 西南記伝[M]. 上巻 2. 東京:黒竜会本部. 645-692.
- 黒竜会編（1911）. 西南記伝[M]. 中巻 1. 東京:黒竜会本部. 17-256.
- 山田済斎（1939）. 西郷南洲遺訓[M]. 東京:岩波書店. 5-20.
- 鹿児島県編(1943). 鹿児島県史[M]. 第3巻. 鹿児島:鹿児島県. 859-929.
- 井上清（1970）. 西郷隆盛（下）[M]. 第11版. 東京:中央公論社. 198-216.
- 西郷隆盛全集編集委員会編（1978）. 西郷隆盛全集[M]. 第3巻. 東京:大和書房. 423-529.
- 佐々木克（1991）. 西南戦争における西郷隆盛と士族[J]. 人文學報 = The Zinbun Gakuhō : Journal of Humanities, 68: 1-46.
- 猪飼隆明（1992）. 西郷隆盛:西南戦争への道[M]. 東京:岩波書店, 184-194.